

学校における児童・生徒の非行防止対策の研究(Ⅱ)

—— 非行性の分析とその形成過程に関する考察 ——

目 次

はじめに	1
I 研究の目的	3
II 研究の構想	3
1 研究計画の概要	3
2 研究経過の概要	3
3 研究の方法	3
1) 調査対象	3
2) 調査の方法	4
3) 調査結果の処理	5
III 調査の内容と結果の考察	6
1 非行生徒の認知・反応の一般的傾向	6
1) 非行生徒の環境に対する認知傾向の概要	6
2) 非行生徒の環境に対する反応傾向の概要	8
3) 非行生徒の認知傾向と反応傾向との関係	11
4) 認知・反応傾向の適応類型と行動(非行)との関係	13
2 非行生徒の認知・反応傾向の具体的様相とその形成過程	14
1) 家庭に対する認知傾向の具体的様相とその形成過程	14
2) 家庭に対する反応傾向の具体的様相とその形成過程	20
3) 社会に対する認知傾向の具体的様相とその形成過程	24
4) 社会に対する反応傾向の具体的様相とその形成過程	28
3 総合的考察	31
おわりに	31
引用・参考文献	32

はじめに

戦争のあとは、青少年の非行が質・量ともに悪化するというのは、世界の歴史の示すとおりである。第2次世界大戦後の社会の混乱期における青少年の非行化は歴史の流れに従う一つの社会的必然として理解することも許されよう。しかるに、戦後すでに20数年を経た今日において、なお、青少年非行対策が国家の重要問題として取りあげられているということは、青少年非行対策の推進がいかにむずかしいものであるかを物語るものであろう。

青少年非行対策は、教育・社会福祉・法務・労働等の広い分野にわたって、総合的、多面的に検討され、実施に移されている。そのためか、昭和30年以来、増加の一途をたどっていた青少年非行も数的には、ここ一兩年横ばいか、やや下降の傾向を示し始めてきた。しかしながら、質的にみた場合、兇悪化、都市集中化、集団化、低年齢化、一般家庭の子女の増加、^(注1)初犯者の増加などの傾向は依然として、変わっていない。また、数的に減少したのは刑法犯であって、犯罪予備軍といわれるく犯行為やその他の不良行為をする少年は、むしろ、増加しているのであって、特に中学校・高等学校生徒の非行化傾向は、社会的・教育的に解決を迫まられている大きな課題となっている。

青少年非行対策の推進にあたって、従来、教育機関のたおくれが日立っている。学校では、ややもすると直接的な非行対策は、学校教育のわく外であるとする考え方が強く、他の青少年関係専門機関に依存しすぎたり、あるいは、学校の体面等にもみとられて秘密のうちに処理してしまうという傾向があったことは否めない。また、児童・生徒ひとりひとりの能力や適性を無視した画一的な教育や過度の進学準備教育知育偏重の教育、職業教育に対する無理解、一部の学校に見られる弛緩した学校経営や学校の権威の喪失などが、最近における児童・生徒の非行問題の教育的背景として注目しなければならないであろう。^(注2)

学校がその教育目標を達成し、児童・生徒ひとりひとりの人格のより正常な発達と個性の伸長をはかるために、生徒指導の重要性が教育界において強く認識されてきた。生徒指導の意義は少年非行の対策という、いわば、消極的な面にもみあるのではなく、児童・生徒の能力・適性・特性・進路などに即応した適切な教育が行なわれるよう調和のとれた教育課程を編成し、学校の全教育活動を正常、かつ、活発に運営することによって、児童・生徒が学校や家庭、地域社会の生活によりよく適応し、充実した意義ある日々を送ることができるようにするという積極的な面が、より基本的であることはいうまでもない。

しかしながら、現実的には直接的な非行対策を必要とする場合が少なくない。要は積極的な生徒指導と消極的な生徒指導とが時と所に応じて、問題に即応して適切に組み合わせられて具体化されるべきであろう。もしも、学校における児童・生徒の非行対策が、学校教育の営みの中において適切に行なわれるならば、^(注3)他のいかなる青少年関係機関でも、果たし得ない大きな効果を期待することが可能であり、青少年非行防止対策に占める学校の役割は、きわめて大きい。そして学校には緊要な今日的課題として、その解決に取り組みなければならない社会的責任と使命を負わされているのである。ここに、学校における児童・生徒の非行防止対策の研究の意義を見いだすのである。

次にこの研究の理論的基礎となっている「非行性」について、研究者の立場を明らかにしておきたい。非行の原因やその発生の機制については、多くの立場とそれに基づく、いろいろの学説があるが、今のところ、これといった定説はみられない。しかしながら、素質的要因と環境的要因の相互作用によって、非行性は形成され、非行行動は発生すると考える「総合的動力的犯罪論」の立場は、オーソドックスなものとして一般に認められているところである。非行性という概念は、アイヒホルン (Aichhorn 1941) が、人格の側に相当程度固定された継続的情緒障害を示すものとして用いたのであるが、フリードランダー (Friedlander 1947) は、これをさらに幼少期の環境との関係において人格に固定された反社会的性格に求めた。しかし、その固定度は程度の問題であり、広義には、ヒーリー (Healy 1937) やラウリー (Lowrey 1944)、タッパン (Tappan 1949) などの考え方の基礎にあるように、環境との関係において学習されている非行的傾向一般に用いることが妥当であるといわれている。(注4)

この研究では、「非行性」とはヒーリー等の考えに基づいて、「個人の人格のうちに潜む環境との関係において培われた恒常的な反社会的状態—非行的傾向—」としてとらえている。人格 (Personality) とはオールポート (Allport 1937) によれば、個人の環境に対する独特の反応の仕方を規定する個人における力動体制であると定義される。人格はたえず固定されながらも変化発展していく。すなわち、人格特性には、環境条件から独立して深く固定されたものから、環境条件によって容易に変化する周辺のものにいたるまで種々の段階 (層) が存在する。(注5)

人格の中に非行に走りやすい反社会的状態が形成されるための機制のおもなものとして水島恵一氏は次の二つをあげている。(注6)

- a 欲求不満状態の反応とみられる一次性行動異常や愛情、しつけなどの不足が行動の社会的統制を弱める結果、本来の欲求傾向が非行的に条件づけられるなど、適応能力の障害に関する情動的不適応の機制
- b 反社会的集団への所属や非行的文化への接触によって、反社会的な準拠わく (Frame of reference) や役割意識などが固定し、規範性の障害 (非行観念の取り入れ) が人格の側に条件づけられ、反社会的な態度が形成される非行的文化感応の機制

この両機制は基底的な人格要因と相まって、相互作用をしながら反社会的に固定し、人格の中における非行的傾向、すなわち、非行性は形成されていくものであるが、主として文化感応の機制によるものは、人格のより社会的な表層部に作用するのに対して、情動的不適応の機制によるものは人格のより深層部に影響を与え、根深い非行性が形成されている。

以上の水島氏の所論は、これに賛同する多くの研究があるが、われわれの前2か年による研究によってもそれを裏付けることができる。もちろん、多くの非行のなかには、非行性をもたない児童・生徒によって行なわれるものもあることは当然であるが、われわれはこれを急性機制 (一過性) によるものとして、この研究対象からは除外している。それ以外の非行は、それが人格性のものであっても、また、環境性のものであっても、非行をする児童・生徒の人格には非行性といわれる人格の傾向が存在するということを前提としているので、特に非行性に関する考え方を冒頭において述べたのである。

I 研究の目的（第3年次）

前述したように、非行をする生徒には非行をしやすい人格的傾向があることを、前2か年の非行性の識別と予測に関する研究調査によって、客観テストを用いて実証的に確かめたのであるが、本年度は非行生徒の有する非行性を、彼らの環境に対する認知傾向、および、それに基づく反応傾向の両面から分析して、その具体的様相を把握するとともに、そのような認知傾向や反応傾向をもたらした要因を追究することによって、非行性形成過程を知り、効果的な非行防止対策を推進するための手がかりを得ようとするものである。

II 研究の構想

1 研究計画の概要

この研究は、当教育センターにおける「子どもの健全育成のための幼児・家庭教育、生活指導、教育相談治療に関する第1次3か年研究計画」の一環として昭和39年度に計画されたものであり、各年次ごとの計画の概要は次のとおりである。

第1年次の研究計画（昭和39年度） 集団ロールジャッパ・テストと適応性診断テスト（長島貞夫著）を用いて、生徒の潜在的な非行性を識別することの可能性について、非行生徒群と無非行生徒群の自己統制力と環境体験の状態を調査測定し検討する。

第2年次の研究計画（昭和40年度） 第1年次の研究による非行性識別法の実用性について、テストのめくら分析（Blind analysis）による判定結果と実際行動との関連性の考察、EIPCテスト結果との比較、および、追跡調査結果との比較等の方法により検討する。
両年次の研究のねらいを、要約すれば、非行生徒の人格の特徴である非行性を客観テストで測定し把握することの可能性を実証的に検討しようとするものである。

第3年次の研究計画（昭和41年度） 第1年次・第2年次の研究によって確かめた非行性について、その具体的様相を客観テスト（教研式適応性診断検査、略称DAI）や質問紙法、作文法、面接法によって把握し、その形成過程と要因について考察する。

2 研究経過の概要（略 研究紀要第50集、および、第54集参照）

3 研究の方法

1) 調査対象

新潟市内の工場地帯で非行多発地域にあるA中学校の3年生383名（男子213名、女子170名）を調査対象とした。この生徒は第2年次の調査対象と同一の学級の生徒を対象として選んだのであるが、転出入等のため前年に比べて総数では変化はないが、男子4名増、女子4名減となっている。これらの調

査対象のなかには、精神薄弱、精神異常等の精神的欠陥のあるものは含まれていない。このうち非行生徒は男子48名、女子15名で、前年に比べて男子1名減、女子2名減、総数で3名減となっている。

この調査では、非行とは、「すべての非行行動は、どのような特定の形態をとろうとも、社会規律の要求に対する個人の不順応という公分母をもつものであり、……成人社会生活の複雑した基準に対する不適応の一形態である。」というグリュック夫妻 (Glueck, S.& E.) の定義(注7)に基づき、その具体的内容の分類としては、全国教育研究所連盟共同研究生活指導班で採用した基準に従い、現在の社会の価値基準である法律、規則、道徳、習慣などに適応することができないで、健全な社会にとって有害な行動で、

- 現行少年法の規定に触れる 犯罪行為 (14才以上で刑法その他の法令に違反する行為)
触法行為 (14才未満で刑法その他の法令に違反する行為)
ぐ犯行為 (将来、刑法やその他の法令に違反するおそのある行為)
- その他の不良行為

をするものを含めて考えている。この研究における非行生徒63名の非行種別による分類は次のようにな

表1

性別	種別	犯罪・触法行為	ぐ犯行為	その他の不良行為	計
男		9	15	24	48
女		3	3	9	15
計		12	18	33	63

っている。非行生徒の出現率は男子22.5%、女子8.2%、男女平均16.4%である。

2) 調査の方法 (数字は人数)

第1次調査 全調査対象生徒383名に対し、教研式適応性診断検査(略称DAI)を実施し生徒の環境に対する認知傾向と、それに基づく反応傾向を調べた。

ここで用いた教研式適応性診断検査(DAI)は次のような検査である。(注8)

- ① 検査の目的 この検査は、生徒の適応行動を測定・診断するのではなく、適応行動を規定するであろうと思われる個人の内部的な構え、すなわち、適応傾向を測定・診断し、生徒理解をいっそう、深めるとともに、生徒の生活指導やカウンセリングに役立つ資料をうるために作成されている。DAIとはDiagnostic Adjustment Inventoryの頭文字をとったものである。
- ② 検査の構成 この検査は、次表に示したように、適応傾向のセクション(Section)を環境

適応傾向のセクション		適応傾向のレベル	
		一部 認知傾向C	二部 反応傾向R
環 境	家庭(Home)	H ₁	H ₂
	社会(Social)	S ₁	S ₂
個 人	身体(Physical)	P ₁	P ₂
	精神(Mental)	M ₁	M ₂

適応傾向と個人適応傾向にわけ、さらに、環境適応傾向を主として、家庭環境に関する家庭適応傾向(H:Home)と、主として一般社会、および、学校環境に関する社会適応傾向(S:Social)に、また、個人適応傾向を身体的側面に関する身体適応傾向(P:Physical)と精神的側面に関する精神適応傾向(M:Mental)とにわけ、合計4つのセクションによって構成されている。そして、この4セクションについて

認知傾向と反応傾向の2つのレベルからとらえるようになっている。検査の「一部」の認知傾向（C：Cognition）とは、個人がとらえている環境や自己自身の現実の問題に対する見方であり、「二部」の反応傾向（R：Response）とは、この認知傾向に基づいて、環境や自己自身にいかに対応しようとしているかという構えともいえるべきものである。

こうして、4つのセクションと「一部」および「二部」との組み合わせに対して、それぞれ質問項目が15ずつ配分され、合計120項目によって構成されている。

この調査では、本年次の研究目的から考えて環境に関するセクションの「一部」認知傾向と「二部」反応傾向に関する60項目についてのみ検討し、個人に関するセクションの60項目は除外した。

第2次調査 第1次調査による認知傾向と反応傾向の具体的様相を把握するために、質問紙による調査を383名に対し実施した。この質問紙調査は全国教育研究所連盟共同研究生活指導班が非行生徒の意識調査のために作成したもので、次の質問項目によって構成されている。

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1 将来の生き方（7項目） | 2 おとなに対する考え方（6項目） |
| 3 教師の信用（6項目） | 4 学校に対する要望（9項目） |
| 5 教師に対する要望（9項目） | 6 友人間の話題（16項目） |
| 7 生徒間の不満（7項目） | 8 青少年非行の原因（8項目） |
| 9 家庭生活の不満（10項目） | |

第3次調査 第1次・第2次調査の内容をさらに具体的に裏付けるために、2個学級83名（男48名、女35名、うち非行生徒 男12名、女3名）に対し、自由題で人観・社会観・家庭観・非行観に関する作文調査を実施した。

第4次調査 第1次から第3次までの調査によって、把握した非行生徒の環境に対する認知・反応の傾向を、さらに、具体的に知るとともに、そのような認知・反応傾向が形成された過程を追究するために、1個学級42名（男23名、女19名、うち非行生徒男9名、女2名）に対し、個別に面接調査を実施した。

3) 調査結果の処理

① 教研式適応性診断検査については、採点と整理の手びきに従って、Adスコア（Adjustment - score 不適応性傾向得点）とPrスコア（Problem - score 問題性得点）を算出し、男女別にAd - スケール（Adjustment - scale 不適応傾向尺度）とPr - スケール（Problem - scale 問題傾向尺度）にあてはめ、Ad類型（C, R, CR, q）とPr傾向（U, In, Ex, ex）の分類をした。次に、非行生徒群と無非行生徒群とにわけて比較し、認知傾向と反応傾向の差異について統計的検定をした。

② 質問紙調査については、各質問項目の選択肢ごと、男女別に非行生徒群と無非行生徒群にわけて集計し、両群の差異を検討するとともに、①の調査の具体的様相を把握する資料とした。

③ 作文については特に分類・集計は行なわないで①の調査の具体的様相を把握する資料とした。

④ 個人面接の結果については①の具体的様相を把握し、その形成過程を追究する資料とした。

Ⅲ 調査の内容と結果の考察

1 非行生徒の認知・反応の一般的傾向 - DAIの分析結果を中心として -

1) 非行生徒の環境に対する認知傾向の概要

全調査対象生徒 383 名に対し教研式適応性診断検査を実施し、家庭、社会に対する認知について、不適応傾向の程度をパーセントイル (%ile) であらわした。この検査では 7 %ile 以下を不適応傾向の高いものとし、7 %ile から 30 %ile までを準不適応傾向にあるものとし、30 %ile 以上のものを正常としている。この検査の結果について、無非行生徒群 (以下 N 群という) と非行生徒群 (以下 P 群という) の認知傾向の状態を、男女別にして比較すると次のようになる。

① 家庭 (H₁) のセクションにおける認知 (C) の傾向

男子生徒の認知の傾向

女子生徒の認知傾向

表 2 (数字は実数)

表 3 (数字は実数)

反応傾向 群別	不適応	準適 適	不 応	正 常	計
N 群	4	7		154	165
P 群	3	8		37	48
計	7	15		191	213

反応傾向 群別	不適応	準適 適	不 応	正 常	計
N 群	7	20		128	155
P 群	3	3		9	15
計	10	23		137	170

$$\chi_0^2 = 10.94 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

$$\chi_0^2 = 6.96 \quad 0.02 < P < 0.05 \quad df = 2$$

この調査の結果は上表のようになるが、男女とも N 群と P 群の家庭のセクションにおける認知傾向には差がみられる。すなわち、男子の P 群では自己の家庭に対し不適応、準不適応の認知傾向を有するものは 11 名で全非行生徒の 22.9 % であるのに対し、N 群では 11 名でわずか 6.7 % にすぎない。女子では P 群 6 名 (40.0 %)、N 群 27 名 (17.4 %) となっており、非行をする生徒の家庭に対する認知傾向は、非行のない生徒のそれに比し、男女ともに不良なものが多く、特に女子にその傾向が強くみられる。

② 社会 (S₁) のセクションにおける認知 (C) の傾向

男子生徒の認知傾向

女子生徒の認知傾向

表 4 (数字は実数)

表 5 (数字は実数)

反応傾向 群別	不適応	準適 適	不 応	正 常	計
N 群	7	35		123	165
P 群	8	13		27	48
計	15	48		150	213

反応傾向 群別	不適応	準適 適	不 応	正 常	計
N 群	9	25		121	155
P 群	3	5		7	15
計	12	30		128	170

$$\chi_0^2 = 10.49 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

$$\chi_0^2 = 7.84 \quad 0.01 < P < 0.02 \quad df = 2$$

この検査の結果は上表のように、男女とも N 群と P 群の社会に対する認知傾向には差がみられる。すなわち、男子 P 群では自己をとりまく社会 (学校・地域社会) に対し、不適応・準不適応の認知傾向を

有するものは21名で、全非行生徒の43.8%に及んでいるのに対し、N群は42名で25.5%である。女子ではP群8名(53.3%)、N群34名(21.9%)であり、非行をする生徒の社会に対する認知傾向は、非行のない生徒のそれに比し、不良なものが多いことがわかったが、女子にその傾向が強くみられる。

③ 各検査項目ごとにみた認知傾向の差異(認知傾向の具体的差異)

前記の調査によって非行生徒と無非行生徒の家庭、および、社会に対する認知傾向には統計的に有意差があり、両群の認知の状態が異なっていることがわかったが、具体的にはどのような項目に認知傾向の差異があるのかを、各検査項目ごとに χ^2 (カイ)自乗法によって検定した。その結果、有意差のあるものは次の各項目であるが、男女によってかなり差がみられる。

a 家庭のセクション(H₁)における認知傾向の差異

(※※1%水準, ※5%水準で有意差のある項目, 項目番号の○印は男女ともに有意差のあるものを示す。)

表 6

H ₁ 調査項目	男	女
1 私の親は、私のことをいまだに子どもあつかいしている。	※※	
2 私の親は、私の友だちをこころよくむかえてくれない。	※	
3 私の親は、私の気持ちをわかってくれない。		※※
4 私の親は、私に無理な要求をする。		
⑤ 私の親は、私のすることになんでも文句をいう。	※	※※
6 私の親は、私のすることを信用してくれている。		
7 私の親は、私に対してきびしすぎる。		※※
8 私の家の生活は、たのしい。		※※
9 私の家には、口をきくのもいやな人がいる。		※※
10 私の家族の間には、争いが多い。		※※
⑪ 家の人には、私をかわいがってくれない。	※	※※
12 私の家の職業は、つまらない職業である。	※※	
13 私の家庭生活が不幸なのは、お金がないからだ。		
14 私の家庭はつまらない。		※※
15 家族の人の死亡や病気のために、私の家庭生活が不幸になった。		

自己の家庭に対する認知の状態は、各項目別にみると男子では、項目1, 2, 5, 11, 12の5項目に有意差がみられ、女子では、項目3, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 14の8項目に有意差がみられる。男女ともに有意差のある項目は5, 11の2項目にすぎない。このことは、同じ非行をする生徒であっても、男女の性別によって認知の内容が量的、質的にかなり異なっていることを示している。男子では、親の子どもへの取り扱い方、家庭の職業など主として外面的な項目に不良な認知傾向を有するのに対し、女子では、親の子に対する愛情、理解、人間関係など主として家庭的、質的なものに不良な認知傾向を有するものが多い。

b 社会のセクション(S₁)における認知傾向の差異

(※※ 1%水準, ※ 5%水準で有意差のある項目, 項目番号の○印は男女ともに有意差のある項目を示す)

表 7

S ₁ 調査項目	男	女
①⑥ 私は,先生からきられている。	※※	※
17 私は,クラスの友だちからきられている。		
18 クラスの友だちは,私に不親切だ。		※※
19 先生は,私のことをよくしかる。	※※	
20 私には,仲のよい友だちがほとんどない。		※※
②① 友だちは,私のことを仲間はずれにする。	※	※※
22 友だちは,私のことを信用していない。		※
23 学校の生活はつまらない。		※※
24 友だちは,よく私の悪口をいっている。		
25 私は,よく友だちの気分を害してしまう。		
26 私の学校は,よい学校だ。		
27 近所の人,よく私の悪口をいっている。		
28 世の中は,つめたい,信じられないところだ。		※※
29 クラブ活動や生徒会はつまらない。		※※
30 異性の友だちは,私をきらっている。		※※

自己のおかれている社会に対する認知の状態は,各項目別に見ると男子では項目16,19,21の3項目に有意差がみられるのに対し,女子では項目16,18,20,21,22,23,28,29,30の9項目に有意差がみられる。男女ともに有意差があるのは,項目16,21の2項目にすぎない。このことは,前述の家庭に対する認知傾向と同じように,非行生徒といっても男女の性別によって認知内容が量的,質的にかなり違っていることを示している。男子では,主として教師の生徒に対する態度に反発を感じているが,学校生活,友人関係,世の中などに対する認知については非行のない生徒群と変わっていない。これに対し女子では,教師に対するものより,学校生活の内容に関するものや,対友人関係において有意差がみられる。特に異性についての認知傾向の不良は,女子の非行に不純異性交遊の多いことと関連があるのではなかろうか。社会に対する認知傾向も前述の家庭に対する認知傾向と同じく,男女の性別によって質的な差異があるといえよう。

2) 非行生徒の環境に対する反応傾向の概要

前節で非行生徒の家庭や社会に対する認知傾向の特徴を,無非行生徒との比較によって概観したが,現実に不適応行動をひき起こすための前段階ともいべき内部的な構え,すなわち,反応傾向についても1)と同じ方法によって比較した。反応傾向についても7%ile以下を不適応傾向の高いもの,7%ileから30%ileまでを準不適応傾向にあるもの,30%ile以上のものを正常なものとしている。この検査の結果について,非行生徒と無非行生徒の反応傾向の状態を比較すると次のようになる。

① 家庭(H₂)のセクションにおける反応(R)の傾向

女子生徒の認知傾向

表 9 (数字は実数)

反応傾向 群別	不適応	準 適	不 応	正 常	計
N 群	3	11	151	165	
P 群	2	14	32	48	
計	5	25	183	213	

$\chi^2_0 = 19.54 \quad P < 0.01 \quad df = 2$

反応傾向 群別	不適応	準 適	不 応	正 常	計
N 群	4	28	123	155	
P 群	3	4	8	15	
計	7	32	131	170	

$\chi^2_0 = 11.93 \quad P < 0.01 \quad df = 2$

この調査の結果は上表のようになるが、男女ともにN群とP群の社会のセクションにおける反応傾向に差がみられる。すなわち、男子P群では自己をとりまく学校や社会に対し、不適応、準不適応の反応傾向を有するものは16名で、全非行生徒の33.3%であるのに対し、N群では14名で、わずかに8.5%にすぎない。女子ではP群7名(46.7%)、N群32名(20.6%)となっており、非行をする生徒の反応傾向は、非行をしない生徒のそれに比し、男女ともに不良なものが多いことがわかったが、女子では特にその傾向が強い。

② 社会(S₂)のセクションにおける反応(R)の傾向

男子生徒の反応の傾向

表 10 (数字は実数)

反応傾向 群別	不適応	準 適	不 応	正 常	計
N 群	6	32	127	165	
P 群	9	10	29	48	
計	15	42	156	213	

$\chi^2_0 = 10.54 \quad P < 0.01 \quad df = 2$

女子生徒の認知傾向

表 11 (数字は実数)

反応傾向 群別	不適応	準 適	不 応	正 常	計
N 群	4	35	116	155	
P 群	6	3	6	15	
計	10	38	122	170	

$\chi^2_0 = 34.97 \quad P < 0.01 \quad df = 2$

この調査の結果は上表のように、男女ともN群とP群の社会に対する反応傾向には差がみられる。すなわち、男子P群では自己をとりまく社会(学校・地域社会)に対し、不適応、準不適応の反応傾向を有するものは19名で、全非行生徒の39.5%に及んでいるのに対し、N群では38名で23.0%である。女子P群は9名(60%)、N群は39名(25.8%)であり、非行をする生徒の社会に対する反応傾向は、非行のない生徒のそれに比し、不良なものが多いことがわかる。特に女子にその傾向が著しい。

③ 各検査項目ごとにみた反応傾向の差異(反応傾向の具体的差異)

前記の調査によって、非行生徒と無非行生徒の家庭、および社会に対する反応傾向には統計的に有意差があり、両群の反応の状態が異なっていることがわかったが、具体的にはどのような項目に反応傾向の差異があるのかを、各検査項目ごとに χ^2 (カイ)自乗法によって検定した。その結果、有意差のあるものは、次の各項目であるが、認知傾向に比べると男女共通のものが多く認知傾向ほど性別による差異は認められない。

表12 a 家庭のセクション (H₂) における反応傾向の差異

(※※ 1%水準, ※ 5%水準で有意差のある項目, 項目番号の○印は男女ともに有意差のあるものを示す)

H ₂	調査項目	男	女
1	あなたは、家出したいと思うことがありますか。	※	
2	あなたは、どんなことでも親にきめてもらいますか。		
3	あなたは、友だちの家庭生活をうらやましく思いますか。		※※
4	あなたは、親に気がるに相談できますか。		※
5	あなたは、家庭で気らくにいられますか。		
6	あなたは、親に対して反抗することが多いですか。	※	
7	あなたは、自分の家に友だちをつれてくるのがいやですか。		
⑧	あなたは、家に帰るのがいやで、おそくまで遊んでいることが多いですか。	※※	※※
9	あなたは、できることなら今の親とちがう親がほしいと思いますか。		※
⑩	あなたは、いつも親をさけていたいと思いますか。	※※	※
11	あなたは、親をおそれていますか。		
⑫	あなたは、親にかくしだてをすることが多いですか。	※	※※
⑬	あなたは、家で口をきく気になれないことがたびたびありますか。	※	※※
14	あなたは、学校で必要なお金を親からもらうとき、気がるにいただけますか。		
⑮	あなたは、家族のだれかに、にくしみをいだいていますか。	※※	※※

自己の家庭に対する反応の状態は、各項目別にみると男子では項目1, 6, 8, 10, 12, 13, 15, の7項目に有意差がみられるのに対し、女子では項目3, 4, 8, 9, 10, 12, 13, 15, の8項目に有意差がみられる。男女ともに有意差のみられるのは、項目8, 10, 12, 13, 15の6項目で、かなり、男女の反応傾向は量的にも内容的にも類似しており、いずれも、家族の人間関係、特に親に対する子どもの構えが不良であることがわかる。

表13 b 社会のセクション (S₂) における反応傾向の差異

(※※ 1%水準で有意差のある項目, 項目番号の○印は男女ともに有意差のあるものを示す)

S ₂	調査項目	男	女
16	あなたは、他のクラスにかわりたいと思いますか。		
17	あなたは、学校でなるべく一人でいたいと思いますか。		
18	あなたは、他の学校にかわりたいと思いますか。		
19	あなたは、休日に友だちと遊びに出かけることがありますか。		
20	あなたは、友だちの誘いをことわることが多いですか。		
21	あなたは、意見のちがう友だちとでも仲よくつき合っていけますか。		
22	あなたは、人前でもあまり恥ずかしがらずに発言しますか。		
23	あなたは、集団活動に参加することはいやでたまりませんか。		※
24	あなたは、近所の人をなるべくさけるようにしていますか。		
⑮	あなたは、友だちにさそわれると、悪いと思うことでもやっつけてしまいますか。	※※	※※
⑯	あなたは、友だちとよくけんかをしますか。	※※	※※
27	あなたは、友だちの成功をよるこんであげられますか。		※※
28	あなたは、クラスでできたことには、自分が反対でも従いますか。		※※
29	あなたは、異性の友だちとでも、気がるに話ができますか。		
30	あなたは、どこか他の土地に引っ越してしまいたいと思いますか。	※	

自己のおかれている社会に対する反応の状態は、各項目別にみると男子では項目25, 26, 30の3項目に有意差がみられるのに対し、女子では項目23, 25, 26, 27, 28, の5項目に有意差がみられる。男女ともに有意差のあるのは、項目25, 26の2項目であるが、かなり、男女の反応傾向は類似しており、特に友人関係における反応傾向の不良が目立っている。

3) 非行生徒の認知傾向と反応傾向との関係

前節1), 2)の調査によって, 非行をする生徒の家庭や社会に対する認知傾向, および, 反応傾向は, 非行をしない生徒に比べて, 統計的有意差があることを確かめた。しかし, この調査だけでは認知傾向と反応傾向との関連性が明らかでないので, 両因子の関連性を, ϕ (ファイ) 相関係数によって検討した。

その方法としては, 各セクション別に男子 213 名, 女子 170 名について, Ad スコアごとの累積人数を求め, 次の公式によって中央値を算出した。(注9)

$$\text{中央値 (Mdn)} = l + \frac{N - 2F}{2 f_m}$$

$$\left(\begin{array}{ll} N \cdots \cdots \text{人数の合計} & l \cdots \cdots \frac{N}{2} \text{人目のある Ad スコアの値} \\ F \cdots \cdots l \text{以下の累積人数} & f_m \cdots \cdots \frac{N}{2} \text{人目の Ad スコアの人数} \end{array} \right)$$

この計算によって算出された男女別・各セクション別の中央値は次のとおりである。

表 14

性別 \ セクション	H ₁ の Mdn	H ₂ の Mdn	S ₁ の Mdn	S ₂ の Mdn
男	1.43 ※	2.06 ※	1.73 ※※	3.17 ※※
女	1.43 ※※	2.04 ※※	1.43 ※※	2.52 ※※

※※ 普通
※ やや少ない

これを中央値による集団判定基準表(注10)によって判定すると, この調査対象者の不適応傾向の平均は各セクションとも「普通」か「やや少ない」に該当し, 集団的には問題がない。次に個々の調査対象者を中央値によって, それ以上(不適応傾向が多い)のものと, それ以下(不適応傾向が少ない)のものに分類し, 男子非行生徒, 女子非行生徒, 男子無非行生徒, 女子無非行生徒の各群ごとに, 各セクションにおける認知傾向と反応傾向の相関を求めるために, 中央値で区分した4領域の相関表を作成した。

① 家庭(H)のセクションにおける認知傾向(H₁)と反応傾向(H₂)の相関

• 男子 N 群 (165 名)

• 男子 P 群 (48 名)

表 15 (数字は人数)

認知傾向 \ 反応傾向	Mdn 以下	Mdn 以上	計
Mdn 以下	101	20	121
Mdn 以上	10	34	44
計	111	54	165

$$\phi = 0.25 \quad \chi_0^2 = n\phi^2 = 10.31$$

危険率 0.01 以下で相関がある。

表 16

認知傾向 \ 反応傾向	Mdn 以下	Mdn 以上	計
Mdn 以下	17	5	22
Mdn 以上	8	18	26
計	25	23	48

$$\phi = 0.38 \quad \chi_0^2 = n\phi^2 = 6.91$$

危険率 0.01 ~ 0.025 で相関がある。

• 女子 N群 (155名)

表 17

(数字は人数)

認知傾向 反応傾向	Mdn以下	Mdn以上	計
Mdn以下	87	20	107
Mdn以上	20	28	48
計	107	48	155

$$\phi = 0.396 \quad \chi_0^2 = n\phi^2 = 62.17$$

危険率 0.01 以下で相関がある。

家庭のセクションにおける認知傾向と反応傾向の両因子間には、女子 P群を除いては、いずれも相関関係があり、家庭に対して不良な認知傾向を有するものは、不良な反応傾向をもっているものと考えられる。不良な反応傾向は、それが直接的な不適応行動（非行）ではないが、その前段階ともいえるべき構えであり、直接的行動を誘発する刺激（犯因性行為条件）が加えられれば容易に非行行動となり得る準備態勢ともいえるべきものである。女子 P群では、両因子間に相関関係がみられなかったが、それは調査数が少なかったことに起因するものであろう。

② 社会 (S) のセクションにおける認知傾向 (S₁) と反応傾向 (S₂) の相関

• 男子 N群 (165名)

表 19

認知傾向 反応傾向	Mdn以下	Mdn以上	計
Mdn以下	78	30	108
Mdn以上	22	35	57
計	100	65	165

$$\phi = 0.32 \quad \chi_0^2 = n\phi^2 = 16.90$$

危険率 0.01 以下で相関がある。

• 女子 N群 (155名)

表 21

認知傾向 反応傾向	Mdn以下	Mdn以上	計
Mdn以下	89	11	100
Mdn以上	32	23	55
計	121	34	155

• 女子 P群 (15名)

表 18

認知傾向 反応傾向	Mdn以下	Mdn以上	計
Mdn以下	3	2	5
Mdn以上	3	3	6
計	6	9	15

$$\phi = 0.29 \quad \chi_0^2 = n\phi^2 = 1.26$$

相関は認められない。

• 男子 P群 (48名)

表 20

認知傾向 反応傾向	Mdn以下	Mdn以上	計
Mdn以下	20	11	31
Mdn以上	2	15	17
計	22	26	48

$$\phi = 0.38 \quad \chi_0^2 = n\phi^2 = 6.91$$

危険率 0.01 以下で相関がある。

• 女子 P群 (15名)

表 22

認知傾向 反応傾向	Mdn以下	Mdn以上	計
Mdn以下	3	4	7
Mdn以上	5	3	8
計	8	7	15

$$\phi = 0.357 \quad \chi_0^2 = n\phi^2 = 19.76$$

危険率 0.01 以下で相関がある。

$$\phi = 0.195 \quad \chi_0^2 = n\phi^2 = 0.57$$

相関は認められない。

社会のセクションにおける認知傾向と反応傾向の両因子の間には、女子P群を除いては、いずれも相関関係があり、社会に対して不良な認知傾向を有するものは、不良な反応傾向をもつてであろうことは、家庭に対する場合と同様であり、やがて、これが直接的な不適応行動（非行）へ発展する前段階であることも、家庭に対する場合と同様に考えられる。女子P群では、両因子間に相関関係がみられなかったが、それは家庭のセクションと同じく調査数が少なかったことに起因するものであろう。

以上のように各セクションともに、女子P群を除いては、その認知傾向と反応傾向の間には相関関係があるということがわかったが、このことは個人の有する認知傾向と、それにもとづいて形成される反応傾向との間には関連性があることを示している。すなわち、認知傾向に適応上の問題を有するものは、反応傾向にも適応上の問題をもっているということができよう。

さらに具体的にいうならば、非行をしないものには良い認知傾向と良い反応傾向をもっているものが多く、非行をするものには不良な認知傾向と不良な反応傾向をもっているものが多いということである。

4) 認知・反応傾向の適応類型と行動（非行）との関係

前節3)において個人の認知傾向と反応傾向の間には相関関係があり、認知傾向に適応上の問題をもつものは、反応傾向にも適応上の問題をもつことを明らかにしたが、認知・反応傾向をAdスケールによってAd類型に分類し、非行行動との関係を検討した。Ad類型の分類基準は手びき書によって、C, R, CR類型（Adスコアが1%ile以下の不適応型）、C', R', C'R'型（Adスコアが7~30%ileの間にある準不適応型）とq型（疑問反応の多いもの）、および、正常型（Adスコアが30%ile以上のもの）の3類型とし、調査対象者を各セクションごとに、非行の有無によって分類すると次表のようになる。

① 家庭（H）のセクションにおける認知・反応傾向の適応類型と非行との関係

● 男子の傾向

表 23

(数字は実数)

群 \ 類型	不適応型	準不適応型 疑問型	正常型	計
N 群	5	40	120	165
P 群	5	23	20	48
計	10	63	140	213

$$\chi_0^2 = 16.79 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

● 女子の傾向

表 24

群 \ 類型	不適応型	準不適応型 疑問型	正常型	計
N 群	9	53	93	155
P 群	5	8	2	15
計	14	61	95	170

$$\chi_0^2 = 19.39 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

② 社会（H）のセクションにおける認知・反応傾向の適応類型と非行との関係

● 男子の傾向

● 女子の傾向

表 25

(数字は実数)

群 \ 類型	不適応型	準不適応型 疑問型	正常型	計
N 群	11	73	81	165
P 群	9	20	19	48
計	20	93	100	213

$$\chi_0^2 = 6.53 \quad 0.02 < P < 0.05 \quad df = 2$$

表 26

群 \ 類型	不適応型	準不適応型 疑問型	正常型	計
N 群	10	69	76	155
P 群	2	12	1	15
計	12	81	77	170

$$\chi_0^2 = 9.94 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

この調査によって、家庭のセクションにおいても、社会のセクションにおいても、適応類型と非行との間には密接な関連性があるといえることができる。

以上は、DAIの分析結果を中心として、非行生徒の認知・反応の一般的な傾向を非行のない正常生徒のそれとの比較によって概観したのであるが、この調査の結果、非行生徒は家庭に対しても、社会に対しても不良な認知傾向と反応傾向をもっていることがわかった。男女の性別によって、不適応項目にいくぶんの違いはみられるが、これは男子と女子の感受性の差によるものと考えられる。また、認知傾向と反応傾向の間には相関関係があり認知傾向の良否は、反応傾向の良否と関連することも明らかになった。このことは、不良な認知傾向をもった場合は、必然的に不良な反応傾向を生ぜしめ、非行行動へと発展する危険性のあることを示しているものである。認知・反応傾向を不適応性の程度によって類型的に分類すると、その類型と非行との関連性も認められる。

これらのことから、生徒が家庭や社会環境をどのように認知するかということが、きわめて重要となってくる。そして、その認知に基づいて家庭や社会などに対する反応の構えが形成され、非行へと発展する準備態勢がつけられるのであるが、外界に対してつねに不良な認知をし、不良な反応の構えをとっている場合には、やがて、それが固定化し非行に陥りやすい人格の傾向——“非行性”が形成されていくのである。

2 非行生徒の認知・反応傾向の具体的様相とその形成過程

—— 質問紙・作文・面接調査の結果の考察 ——

1) 家庭に対する認知傾向の具体的様相とその形成過程

家庭に対する認知について、非行生徒と無非行生徒の間で統計的に有意差のある項目について、各項目ごとに質問紙、作文、面接等によって調査した結果を各項目ごとに総合的に考察すると、次の各類型にまとめることができる。

(以下の表では、表中の数字は人数を () 内の数字は%を示す。5%水準で有意差のある項目については表を省略する。)

① 男子の認知傾向の実態

a 親の態度に対する認知傾向

- 私の親は、私のことをいまだに子どもあつかいにしている。

表 27

群 \ 認知の 状態	不適応 (そう思う)	適応 (そう思わない)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	31 (18.8)	103 (62.4)	31 (18.8)	165 (100.0)
P 群	16 (33.3)	22 (45.8)	10 (20.8)	48 (99.9)
計	47 (22.0)	125 (58.7)	41 (19.2)	213 (100.0)

$$\chi^2_0 = 94.14 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

N群では 18.8%のものが、子どもあつかいにされていると感じているのに対し、P群では33.3%のものが、そのように感じている。作文、面接によって具体的にどのような点が「子どもあつかい」されると感じているのかを考察するとN群では、かわ

いがってくるのだが、世話をやきすぎる、心配をしすぎる、というような親の過保護的傾向から独立したいと感じているものが多い。これに対し、P群では、子どもだと思ってごまかそうとする、頭ごなしにどなったり、なぐったりする、自分の意見を聞こうとしないなど、親の身勝手や子どもの、人権無視に対する強い反感がみられ、両群の認知傾向には質的な差が認められる。

また、5%水準で有意差のある項目は、次のとおりであるが、これらの項目においても同様である。

- 私の親は、私のすることになんでも文句をいう。(不適応回答N群 10.9%, P群 27.1%) (男女共通)
- 私の親は、私をかわいがってくれない。(" 1.9% " 8.3%) (男女共通)
- 私の親は、私の友だちをこころよくむかえてくれない。(" 7.6% " 14.5%)

このような親に対する不良な認知傾向は、親の無理解や拒否的、抑圧的、強制的態度に起因して形成されたものと考えられるが、この不良な認知傾向は次第に固定化し、ゆがめられた親子関係へと発展していくであろう。

b 家庭の職業に対する認知傾向

- 私の家の職業はつまらない職業である。

表 28

群 \ 認知の 状態	不適応 (そう思う)	適応 (そう思わない)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	5 (3.0)	140 (84.8)	20 (12.1)	165 (99.9)
P 群	7 (14.6)	34 (70.8)	7 (14.6)	48 (100.0)
計	12 (5.6)	174 (81.8)	27 (12.7)	213 (100.0)

$$\chi^2_0 = 9.8 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

N群では 36.5%である。自己の家庭の職業をつまらなく感じているものは、P群では、すべてブルーカラー階層に属するものであるのに対し、N群ではホワイトカラー階層のものも含まれている。P群が自己の家庭の職業に対してつまらなく感じるという否定的職業観をもつにいたった理由として低収入、社会的地位の低さをあげ、自己の将来の生き方の調査にもみられるように、きわめて、現実的、巧利的、享乐的な考え方を示している。しかし、この背後にあるものは、この階層の人たちの生活態度や職業観、たとえば、家庭を顧みない、子どもにこづかいも与えない、職場の不平やぐちをいう、不道德なことをすることなどから、親の職業について劣等感や卑屈感をもつようになったものと考えられる。

N群では 18.8%のものが、子どもあつかいにされていると感じているのに対し、P群では33.3%のものが、そのように感じている。作文、面接によって具体的にどのような点が「子どもあつかい」されると感じているのかを考察するとN群では、かわ

N群では自分の家庭の職業をつまらなく感じているものは、わずかに 3.0% にすぎないが、P群では 14.6% と 5 倍も高くなっている。家庭の職業は P 群では 72.3% が、工員、大工、作業員、自由労務者等のいわゆるブルーカラー階層に属しているが、

以上の調査から、子どもに対する親の養育態度の不適切、親自身の生活態度や職業的態度の不良性が子どもの否定的認知傾向を形成する要因となっていることを指摘することができよう。

② 女子の認知傾向の状態

女子の場合、1%水準で有意差のあるものは8項目であるが、子どもに対する親の態度と家庭のふんい気や人間関係の2つの類型に分類される。(5%水準で有意差のある項目はない。)

a 親の態度に対する認知傾向

- 私の親は、私の気持ちをわかってくれない。

表 29

認知の状態 群	不適応 (そう思う)	適応 (そう思わない)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	24 (15.5)	92 (59.4)	39 (25.2)	155 (100.1)
P 群	8 (53.4)	4 (26.7)	3 (20.0)	15 (100.1)
計	32 (18.8)	96 (56.5)	42 (24.6)	170 (99.9)

$$\chi^2_0 = 13.18 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

い反発があらわれている。N群にあっては、進学・就職・学習場面などにおける親と子どもの考え方の相違、期待過剰などから、このような認知傾向をひき起こしているものが多く、P群の認知傾向とは質的な差がみられる。

- 私の親は、私のすることになんでも文句をいう。(男女共通)

表 30

認知の状態 群	不適応 (そう思う)	適応 (そう思わない)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	11 (7.1)	125 (80.6)	19 (12.3)	155 (100.0)
P 群	5 (33.3)	8 (53.4)	2 (13.3)	15 (100.0)
計	16 (9.4)	133 (78.2)	21 (12.3)	170 (99.9)

$$\chi^2_0 = 3.257 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

自分のすることにやたらに文句をつける、八つ当たりする、弟妹、友人と比較しては難くせをつけるなどとなっており、そのような態度をとる親に対しては、両群とも強い反感を示しているが、P群のほうに親と子の人間関係の不調を思わせる回答が多くなっている。

- 私の親は、私に対してきびしすぎる。

P群の13.3%、N群の6.5%がきびしすぎると感じているが、両群の差はあまり高くはない。しかし、P群の疑問回答は33.3%もあり、N群の4倍となっている、これらについて第2次以降の調査の結果、疑問反応をしたものの大部分は、きびしすぎると感じていることがわかった。具体的には、前項の“なんでも文句をいう”とほぼ同じもので、厳格、干渉が多いことなどに強い不満と反発を感じているのであるが、P群のほうに親と子の人間関係の不調を思わせる回答が多くなっている。

P群では53.4%のものが、親は自分の気持ちを理解してくれないことを訴えており、N群の15.5%に比し著しく多くなっている。具体的には、現代の時代に即応しない親の古い人生観、価値観の押しつけ、親のご都合主義、親の身勝手などに対する強い

この項目は男子では5%水準で有意差があったが、女子では1%水準で有意差があり、女子の場合、特に両群の認知傾向に大きな差がみられる。P群の33.3%がこのことを強く訴え、N群の7.1%よりも著しく高くなっている。具体的内容としては、自

表 31

群	認知の 状態	不 適 応 (そう思う)	適 応 (そう思わない)	疑 問 (どちらともいえない)	計
N 群		10 (6.5)	132 (81.1)	13 (8.4)	155 (100.1)
P 群		2 (13.3)	8 (53.4)	5 (33.3)	15 (100.0)
計		12 (7.1)	140 (82.3)	18 (10.6)	170 (100.0)

$$\chi_0^2 = 10.49 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

- 私の家の人は、私をかわいがってくれない。 (男女共通)

表 32

群	認知の 状態	不 適 応 (そう思う)	適 応 (そう思わない)	疑 問 (どちらともいえない)	計
N 群		8 (5.2)	132 (85.1)	15 (9.7)	155 (100.0)
P 群		3 (20.0)	8 (53.4)	4 (26.7)	15 (100.1)
計		11 (6.5)	140 (82.3)	19 (11.2)	170 (100.0)

$$\chi_0^2 = 9.94 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

かわいがってくれないと答えているものは、N群の5.2%に対し、P群では20.0%となっている。疑問応答をしているものも個々の具体的調査では、そのほとんどが親の愛情に対し、疑いをもっており、P群では両者合わせて46.7%のものが愛情に対する欲求不満の状態にあるといえる。具体的には、おこってばかりいる、こづかいをくれない、不公平だ、口ぎたなくののしる、仕事ばかりさせられるなど、日常生活事象に基づくものや、なんとなくそのように感ずる、態度でわかる、というようなばく然としたものまでであるが、親の愛情に疑惑をもつということは、子どもの情緒的不安定をきたし、親に対する不良な認知傾向を形成する要因となっている。

以上4つの項目の分析によって、親の態度を非行生徒はどのように感じ、親に対してどのような認知傾向をもっているかを具体的にみたのであるが、親の態度は非行生徒の不良な認知傾向を形成する重要な要因となっていることがわかる。

b 家庭のふんい気や人間関係に対する認知傾向

- 私の家の生活は、たのしい。

表 33

群	認知の 状態	不 適 応 (そう思わない)	適 応 (そう思う)	疑 問 (どちらともいえない)	計
N 群		15 (9.7)	113 (72.9)	27 (17.5)	155 (100.1)
P 群		7 (46.7)	3 (20.0)	5 (33.3)	15 (100.0)
計		22 (12.9)	116 (68.2)	32 (18.8)	170 (99.9)

$$\chi_0^2 = 22.0 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

家庭の生活がたのしくないと感じているものは、N群では9.7%であるのに対し、P群では約半数に近い46.7%の多数であり、たのしいと感じているものは20%にすぎない。疑問応答を加えると80%のものが、家庭生活に不満を感じている。その内容については、項目3 (気持ちわかってくれない)、5 (なんでも文句をいう)、7 (きびしすぎる)、

9 (口をきくのもいやな人がいる) ,10 (家族間に争いが多い) , 11 (かわいがってくれない) , 14 (家庭はつめたい) などの内容とほぼ同じであり, それらのものが総合され, 長期間, 継続的に作用することによって, "家庭の生活は楽しくない" という認知傾向が形成され, 固定化したものと思われる。女子にこのような認知傾向のものが, 多いことは, 女子の人格傾向が, より家庭の影響を受けやすいためであろう。

- 私の家には, 口をきくのもいやな人がいる。

表 34

認知の 群 状態	不 適 応 (そう思う)	適 応 (そうわない)	疑 問 (どちらでもない)	計
N 群	9 (5.8)	141 (91.0)	5 (3.2)	155 (100.0)
P 群	2 (13.3)	10 (66.7)	3 (20.0)	15 (100.0)
計	11 (6.5)	151 (88.8)	8 (4.7)	170 (100.0)

$$\chi_0^2 = 1.032 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

P群の13.3%のものは, 口をきくのもいやな人がいる, と訴えている。これだけでは, かならずしも, 高い率ではない。しかし, 第2次以降の調査によれば疑問応答をしているものも, ほとんど大部分がそのように感じているのに対し, N群では, そのような傾向はみられなかった。この項目はU反応(稀反応)であり, このテストの標準化の際の出現率, 不適応応答4.8%, 疑問応答3.9%(註11)に比べると, 相当, 高率であることがわかる。具体的には, 父に対するものが最も多く, 次いで母, きょうだいの順になっているが, 父に対して口をきくのもいやだという理由は, 酒を飲んでおこる, 母をいじめる, 自分ばかりかってなことをする, など父の家族に対する非民主的, 専制的態度に対するものが多く, 母に対しては, 口やかましい, 理解がない, ぐちばかりこぼしている, 不公平など, 主として, 子ども自身に対する干渉的態度や日常生活態度に対する反感であり, 他のきょうだいに対しては父母に告げ口をする, いじわるをする, すぐおこる, 父母を独占する, などとなっている。これらの要因が長期間継続的に作用した場合, 口をきくのもいやだという否定的認知傾向が形成されるものと考えられる。

- 私の家族の間には, 争いが多い。

表 35

認知の 群 状態	不 適 応 (そう思う)	適 応 (そうわない)	疑 問 (どちらでもない)	計
N 群	9 (5.8)	126 (81.3)	20 (12.9)	155 (100.0)
P 群	3 (20.0)	6 (40.0)	6 (40.0)	15 (100.0)
計	12 (7.1)	132 (77.6)	26 (15.3)	170 (100.0)

$$\chi_0^2 = 13.42 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

家族の間に争いが多いと感じているものは, N群の5.8%に対し, P群では20.0%に達している。第2次以降の調査によると疑問応答をしているものの大部分は, 争いが多いと感じている。それらの具体的

様相としては、父母のけんかが最も多く、次いで母と祖母、きょうだいどうしとなっている。争いの原因としては、父母の両方とも自分かつてである、父が家庭を顧みない、生活が困るなどをあげているが、家族の争いに対しては強い不快感やけんお感をもっている。このような状態を継続的に経験する場合には家族に対する連帯感、結合感を失い、家庭に対する否定的認知傾向が形成されるものと考えられる。

- 私の家庭はつめたい。

表 36

認知の 状態 群	不 適 応 (そう思う)	適 応 (そう思わない)	疑 問 (どちらともいえない)	計
N 群	2 (13)	142 (91.6)	11 (7.1)	155 (100.0)
P 群	2 (13.3)	10 (66.7)	3 (20.0)	15 (100.0)
計	4 (2.4)	152 (89.4)	14 (8.2)	170 (100.0)

$$\chi_0^2 = 12.07 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

P群では、疑問回答を含めると 33.3% のものが自分の家庭をつめたいと感じており、N群とは大きな差がある。具体的には、家族で話し合ったり、ゲームをすることなどは全くない、たのしい気分になれない、子どもがだいでないのだろうか、家庭に愛着を感じない、友だちの家庭がうらやましい、などと述べている。このような具体的な現象が継続する場合、私の家庭はつめたいという否定的認知傾向が形成され、固定化するものと考えられる。

この調査で女子の場合、親の態度と家庭のふんい気や人間関係が、子どもの家庭に対する否定的認知傾向の形成に大きく影響することを統計的に、また、個々の事例調査に基づいて確かめたのであるが、男子よりも該当項目数も多く、その内容も質的に異なっており、男女の性別によって認知傾向に差がみられ、その形成要因も異なっていることがわかる。

2) 家庭に対する反応傾向の具体的様相とその形成過程

前節で非行生徒の家庭に対する認知傾向の特徴とその具体的様相、およびその形成過程について考察したのであるが、そのような認知に基づいて、彼らはどのような構えでそれに対応しようとしているか、反応傾向の分析考察の結果は次のとおりである。

① 男子の反応傾向の実態

a. 親をさげようとする反応傾向

- 家に帰るのがいやで、おそくまで遊んでいることが多いですか。 (男女共通)

表 37

反応の状態 群	不適応 (はい)	適応 (いいえ)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	4 (24)	154 (933)	7 (43)	165 (1000)
P 群	7 (14.6)	38 (79.2)	3 (6.3)	48 (1000)
計	11 (5.2)	192 (90.1)	10 (4.7)	213 (1000)

$$\chi_0^2 = 11.75 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

N群では不適応回答をしているものは、わずか24%であるのに対し、P群では14.6%、疑問回答を加えると20.9%のものが帰宅がいやでおそくまで遊んでいると答えている。しかもN群では大部分のものが学校内で遊んでいるのに対し、P群では、

町をブラブラする、友だちの家(親の不在)になんとか集っているものが多い。しかも、おそくなくても父母は心配しない、おそく帰ることは別に悪いとは思わない、と答えている。

家へ帰りたくない理由として、家族に顔を合わせるのがいやだ、家へ帰ると仕事をさせられる、文句をいわれる、家の中がつかぬ、外で遊んでいるほうが楽しい、などをあげている。彼らの大部分がこのような家庭に魅力を失い、それ以外に精神的安定を求めようとしていることがわかる。

- いつも親をさげたいと思いますか。 (男女共通)

表 38

反応の状態 群	不適応 (はい)	適応 (いいえ)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	3 (19)	151 (915)	11 (67)	165 (1001)
P 群	6 (12.5)	40 (83.3)	2 (4.2)	48 (1000)
計	9 (4.2)	191 (89.7)	13 (6.1)	213 (1000)

$$\chi_0^2 = 10.72 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

この項目はU反応であり、標準化の際の出現率は不適応回答6.7%、疑問回答7.6%である。^(GE 12)本調査ではN群は不適応回答19%、疑問回答6.7%で標準化時の出現率より低くなっているがP群では不適応回答12.5%、疑問回答4.2%と高くなっている。

具体的には、父母の顔をみるのもいやだ、おこってばかりいるから顔をあわせないようにしている、父母は家にいないほうがよい、など強い拒否的、敵対的な反応傾向を示している。

- 家出したいと思うことがありますか。 (5%水準で有意) (不適応回答N群18.8%、P群37.5%)

この項目ではN群の不適応回答18.8%、疑問回答7.3%、P群の不適応回答37.5%、疑問回答4.2%で、N群にも比較的多くあらわれた反応である。その具体的内容については前記2項目の内容とほぼ同じであり、親をさげたい欲求が強くなった場合、家出をしたいという反応傾向をもつものであろう。しかし現実には家出をしたものはほとんどいないが、このような準備態勢のあるところへ犯因性行為条件として

の刺激が加えられれば容易に現実の行動となるもと考えられる。

このような親をさげよとする反応の構えをとらなければならない家庭環境に継続的におかれる場合、その反応の傾向性は固定化して、非行に陥りやすい人格的傾向 — 非行性 — は形成されるものであるが、このような反応の構えを形成する要因は、親の態度を子どもがどのように認知するかということにかかわるのである。

b 親に反抗しようとする反応傾向

- 家族のだれかに、にくしみをいただいていますか。 (男女共通)

表 39

反応の状態 群	不適応 (はい)	適応 (いいえ)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	1 (0.6)	157 (95.2)	7 (4.3)	165 (100.1)
P 群	9 (1.88)	38 (7.92)	1 (2.1)	48 (100.1)
計	10 (4.7)	195 (91.5)	8 (3.8)	213 (100.0)

$$\chi_0^2 = 27.62 \quad p = 0.01 \quad df = 2$$

N群では家族に対してにくしみの感情をいただいているものは0.6%で、疑問回答を加えても49%にすぎない。P群では疑問回答を加えると2.09%のものが、にくしみをいただいている。

個別調査では父に対するものが最も多く、父の生活態度や子

どもに対する不当な態度に強い反感をもち、こんな父はいなければよい、父はきらいだ、とさえ考えているものもある。母に対しては、そのご都合主義、不公平な態度にくしみをいただき、きょうだいに対しては、親の愛情の独占、わがままな態度にくしみの感情をもっている。同じ家庭内にあって家族どうしてにくしみの感情をもちながら生活するということは、情緒的な安定を失う大きな要因となるであろう。

- 親に対して反抗することが多いですか。 (不適応回答N群 41.8%, P群 64.6%)
- 親にかくしだてすることが多いですか。 (不適応回答N群 6.1%, P群 18.8%) (男女共通)
- 家で口をきく気になれないことがたびたびありますか。

(不適応回答N群 11.5%, P群 18.8%) (男女共通)

以上の3項目は5%水準で有意差のある項目である。その具体的様相については、親に口答える、親とけんかをする、だいじな事は話さない、ごまかしてしまい、なるべく口をきかないようにしている、など数多くみられる。

以上の4項目によって親に対する反抗の具体的様相を調査したのであるが、さきに述べた親からの逃避的態度よりも、いっそう非行化へ接近した状態にあることがうかがえる。

このように親に積極的に反抗しようとする反応の構えは、親の態度に対する子どもの不良な認知に基づいて形成されていくものであることは、認知傾向と反応傾向の相関関係を考察することによって明らかであり、親の子どもに対する態度が非行性形成の要因であることは前節で述べたとおりである。

② 女子の反応傾向の実態

a 親を拒否しようとする態度

- 友だちの家庭生活をうらやましく思いますか。

表 40

反応の状態 群	不適応 (はい)	適応 (いいえ)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	22 (14.2)	109 (70.3)	24 (15.5)	155 (100.0)
P 群	6 (4.0)	5 (3.3)	4 (2.7)	15 (10.0)
計	28 (16.5)	114 (67.1)	28 (16.5)	170 (100.1)

$$\chi^2_0 = 9.45 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

家族の人間関係の不調和をあげ、経済的な理由をあげているものはみられないのに対し、N群では経済的な理由や、ただなんとなくそう感ずる、というようにぼく然と考えているものが多くみられる。

- できることなら今の親とちがう親がほしいと思いますか。 (5%水準で有意)

N群では今の親と別の親がほしいという応答をしているものは、わずかに13%、疑問応答を加えても8.4%にすぎない。P群では133%のものがこのような傾向を示し、疑問応答を加えると26.0%にも及んでいる。この項目はU反応であり、標準出現率に比べてP群は著しく高くなっている。その具体的内容は前項とほぼ同じものであって、親に対する拒否感が強く表明されている。

b 親をさげようとする反応傾向

- 家に帰るのがいやで、おそくまで遊んでいることが多いですか。 (男女共通)

表 41

反応の状態 群	不適応 (はい)	適応 (いいえ)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	3 (1.9)	142 (91.6)	10 (6.5)	155 (100.0)
P 群	5 (3.3)	8 (5.3)	2 (1.3)	15 (10.0)
計	8 (4.7)	150 (88.2)	12 (7.1)	170 (100.0)

$$\chi^2_0 = 31.95 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

被害を受ける危険性も含まれ、非行化の直接的原因となることも予想される。

- 親に気がるに相談できますか。 (5%水準で有意)

N群では親に気がるに相談できないものは31.0%であるのに対し、P群では66.7%のものがそのような傾向を示している。具体的理由として、相談する気になれない、相談の相手になってくれない、相談できるふんい気でない、相談しても何んにもならない、などが多い。

N群でも31.0%のものが気がるに相談できないことを訴えていることから考えて、あるいはこの年齢層における心理的特徴とも考えられるが、この調査の結果、P群の家庭には親と子の人間関係に、愛情、信頼、尊敬などの家庭生活における重要な精神的支柱が欠けていることが、気がるに相談できないという反応傾向を形成している要因と考えられる。

- いつも親をさげたいと思いますか。 (男女共通) (5%水準で有意)

男子では1%水準で有意差のあった項目であり、U反応である。N群では不適応応答1.9%、疑問応答

自己の家庭生活よりも他人の家庭生活をうらやましく思っているものはN群では14.2%、P群では40.0%である。その理由としてP群は、父母が理解がない、家庭がつめたい、話し合える家族がない、自分ばかり差別されるなど、家庭のふんい気、

このような反応傾向はN群13%に対し、P群では33.3%と著しく多くみられ、しかも男子よりもその差は大きい。具体的様相については男子とほとんど同じ傾向である。

おそくまで遊んでいるということは、女子にとっては大きな

7.7%であるのに対し、P群では不適応応答6.7%、疑問応答2.6%と著しく高くなっている。具体的な内容については男子の場合とほぼ同じであり、P群は男女ともに親を避けようとする傾向がみられる。

c 親に反抗しようとする態度

- ・ 親にかくしだてすることが多いですか。 (男女共通)

表 42

反応の状態 群	不適応 (はい)	適応 (いいえ)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	14 (9.1)	126 (81.3)	15 (9.7)	155 (100.1)
P 群	5 (3.33)	5 (3.33)	5 (3.33)	15 (9.99)
計	19 (11.2)	131 (77.1)	20 (11.8)	170 (100.1)

$\chi^2_0 = 179$ $p < 0.01$ $df = 2$

不応答はN群9.1%、P群3.33%でP群が明らかに多くなっている。男子に比べ両群とも親にかくしだてするものの出現率は高く、女子の傾向ともいえよう。

具体的な理由としては、親は信頼できない、理解してもらえない、すぐおこる、など親に対する不信感が強く表明されているが、このような不信感から親に対してかくしだてするという反応傾向が形成されるものであろう。特に異性のことについて絶対に話さないと述べているものもあるが、女子の非行に不純異性交遊の多いことを考えるとき、注意を要する問題であらう。

- ・ 家で口をきく気になれないことがたびたびありますか。 (男女共通)

表 43

反応の状態 群	不適応 (はい)	適応 (いいえ)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	21 (13.5)	117 (75.5)	17 (11.0)	155 (100.0)
P 群	7 (4.67)	5 (3.33)	3 (2.00)	15 (10.00)
計	28 (16.5)	122 (71.7)	20 (11.8)	170 (100.0)

$\chi^2_0 = 13.3$ $p < 0.01$ $df = 2$

など家庭のふんい気や人間関係の不調和、親の非民主的態度によるものが多くみられる。

- ・ 家族のだれかに、にくしみをいだいておられますか。 (男女共通)

表 44

反応の状態 群	不適応 (はい)	適応 (いいえ)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	4 (2.6)	141 (91.0)	10 (6.5)	155 (100.1)
P 群	2 (1.33)	8 (5.34)	5 (3.33)	15 (10.00)
計	6 (3.5)	149 (87.6)	15 (8.8)	170 (99.9)

$\chi^2_0 = 1.33$ $p < 0.01$ $df = 2$

家庭に対する反応の傾向は、男子では親からの逃避、および積極的な反抗の構えとなってあらわれる

N群の不応答は13.5%に対し、P群では4.67%で男子に比べて著しくその差が大きくなっている。

具体的な理由として、親やきょうだいの態度が気に入らない、話しても理解してもらえない、ものの考え方がちがっている、

N群の不応答は2.6%、P群では1.33%でN群の5倍強となり、男子よりもやや高くなっている。

具体的な理由については男子とほぼ同じであり、男女の性差はみられない。

が、女子ではそのほかに消極的な反抗（拒否的態度）となってあらわれている。個々の項目における反応傾向を個別調査によって分析すると男女ともにほぼ同じ傾向がみられ、性差の強い項目は少ない。いずれも、親の生活態度、子どもに対する態度、家庭のふんい気、人間関係などから受ける継続的な不良な刺激（認知）が不良な反応傾向を形成し、非行に陥りやすい不安定な心理的状态となっていることがうかがえる。このように家庭における諸条件が、子どもの非行性の形成に影響するところが大きいことをたしかめたのである。

3) 社会に対する認知傾向の具体的様相とその形成過程

① 男子の認知傾向の実態

社会に対する認知傾向について無非行生徒と非行生徒の間で有意差のあるのは3項目であるが、次の2つの類型に分類することができる。

a. 教師に対する認知傾向

- ・ 私は先生からきらわれている。（男女共通）

表 45

認知の 群	不適応 (そう思う)	適応 (そう思わない)	疑問 (どちらでもない)	計
N 群	10 (6.1)	101 (61.2)	54 (32.7)	165 (100.0)
P 群	10 (20.8)	19 (39.6)	19 (39.6)	48 (100.0)
計	20 (9.4)	120 (56.3)	73 (34.3)	213 (100.0)

$$\chi^2_0 = 12.26 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

N群では61%, P群では20.8%のものが教師にきらわれていると感じている。疑問応答をしたものの大部分は個別調査の結果、N群P群ともに教師の感情については関心をもっていないと登えている。質問紙調査における「教師の信用」についてみると、N群の13.2%、P群の23.4%が自分は教師に信用されていないと感じているが、具体的には、先生はえこひいきする、成績の悪いものは相手にしてくれない、いつも疑いの目でみている、自分はいつもしかれる、など教師に対する不信任感が強くあらわれている。このような日常の学校生活における師弟関係によって、自分は教師にきらわれているという否定的認知傾向が形成され、固定化したものであろう。

- ・ 先生は私のことをよくしかる。

表 46

認知の 群	不適応 (そう思う)	適応 (そう思わない)	疑問 (どちらでもない)	計
N 群	18 (10.9)	111 (67.3)	36 (21.8)	165 (100.0)
P 群	14 (29.2)	20 (41.7)	14 (29.2)	48 (100.0)
計	32 (15.0)	131 (61.5)	50 (23.5)	213 (100.0)

$$\chi^2_0 = 13.12 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

前項の「先生にきらわれている」と本項の「先生はよくしかる」とは表裏一体の関係をなすものであるが、N群では10.9%のものがよくしかられると感じているのに対し、P群では29.2%のものがそのように感じている。

具体的には、わずかのことですぐおこる、いつも自分ばかりおこられる、自分にくまれている、など自分ばかり叱責されているように感じ、前項とともに教師に対する否定的認知傾向を形成している。

b 友人に対する認知傾向

- 友だちは、私のことを仲間はずれにする。（5%水準で有意）（男女共通）

N群では0.6%, P群では6.3%のものが友人から仲間はずれにされていると感じている。不適応応答をしたものはN群, P群ともに多くはないが, N群に対するP群の比率は著しく高くなっている。この具体的内容については, 自分たちを変な目でみる, 成績の良いものだけが集る, バカにしている, 仲間に入れてくれない, など友人関係において強い疎外感をもっている。

② 女子の認知傾向の実態

女子の社会に対する認知について非行生徒と無非行生徒の間で有意差のある9項目は, 次の4つの類型に分類される。

a 教師に対する認知傾向

- 私は、先生からきらわれている。（5%水準で有意）（男女共通）

この項目で不適応応答をしているものは, N群2.6%, P群6.7%で両群とも多くはない。しかし, 疑問応答をしているものN群4.5%, P群7.3%の中には相当数教師からきらわれていると感じているものも含まれている。

具体的内容については男子とほとんど同様であり, 学校生活における教師との関係の不調和から否定的認知傾向が形成されている。

b 友人に対する認知傾向

- クラスの友だちは、私に不親切だ。

表 47

認知の 状態 群	不適応 (そう思う)	適応 (そう思わない)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	4 (2.6)	129 (83.3)	22 (14.2)	155 (100.0)
P 群	2 (13.3)	6 (40.0)	7 (46.7)	15 (100.0)
計	6 (3.5)	135 (79.4)	29 (17.1)	170 (100.0)

$$\chi^2_0 = 16.28 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

ない, などであるが, これらの具体的事実の累積によって, 級友は自分に不親切だという認知傾向が形成されたものであろう。

- 私には仲のよい友だちが、ほとんどいない。

表 48

認知の 状態 群	不適応 (そう思う)	適応 (そう思わない)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	12 (7.7)	135 (87.1)	8 (5.2)	155 (100.0)
P 群	2 (13.3)	9 (60.0)	4 (26.7)	15 (100.0)
計	14 (8.2)	144 (84.7)	12 (7.1)	170 (100.0)

$$\chi^2_0 = 10.69 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

この項目の不適応応答はN群の2.6%に対し, P群は13.3%と高くなっている。疑問応答を加えるとP群では60.0%のものが級友は不親切だと感じている。その理由については, 自分に協力してくれない, いじわるをする, ノートを見せてくれない, 勉強を教えてくれ

この項目の不適応応答はN群の7.7%に対し, P群は13.3%である。仲のよい友だちがいない理由については, 友人はほしくない, だれも相手にしてくれない, 自分は友人にきらわれている, などをあげているが, 親友がないことについ

ては一樣に孤独感、せきりょう感をいだいている。

- 友だちは、私のことを仲間はずれにする。 (男女共通)

表 49

認知の 群	不適応 (そう思う)	適応 (そう思わない)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	3 (19)	141 (910)	11 (71)	155 (1000)
P 群	1 (6.7)	8 (53.4)	6 (40.0)	15 (1001)
計	4 (2.4)	149 (87.6)	7 (10.0)	170 (1000)

$$\chi^2_0 = 18.4 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

- 異性の友だちは、私をきらっている。

表 50

認知の 群	不適応 (そう思う)	適応 (そう思わない)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	5 (3.2)	34 (21.9)	116 (74.8)	155 (99.9)
P 群	4 (26.7)	1 (6.7)	10 (66.7)	15 (100.1)
計	9 (5.3)	35 (20.6)	126 (74.1)	170 (100.0)

$$\chi^2_0 = 15.91 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

一般に女子の異性に対する関心は男子に比べて著しく高いが、特に非行生徒にその傾向が強い。異性にきらわれる理由については、容姿がわるい、成績がわるい、行ないがわるい、などをあげているが、異性にきらわれているということに強い不満や焦燥感をいだいており、自分を認め相手にしてくれる異性に接近したい欲求が強い。

- 友だちは、私のことを信用していない。 (5%水準で有意)

友だちから信用されていないと感じているものは、N群32%に対しP群は200%である。具体的には、何をしても変な目でみられる、みんなにきらわれている、先生にしかられるから、行ないがよくないから、などをあげ、自分が友だちから信用されないことに不満と反感をもっている。

c 学校生活に対する認知傾向

- 学校の生活はつまらない。

表 51

認知の 群	不適応 (そう思う)	適応 (そう思わない)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	11 (7.1)	120 (77.4)	24 (15.5)	155 (100.0)
P 群	5 (33.3)	9 (60.0)	1 (6.7)	15 (100.0)
計	16 (9.4)	129 (75.9)	25 (14.7)	170 (100.0)

$$\chi^2_0 = 11.31 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

この項目はU反応であるが、全国標準に比しP群の出現率は著しく高くなっている。

具体的内容については男子の場合とほぼ同じであり、友人からの疎外感を強くもっている。

異性の友人からきらわれていると感じているものは、N群では32%にすぎないが、P群では26.7%と著しく高くなっている。また、疑問回答がN群、P群ともに多くなっているが、この大部分は異性に対する特別の関心はもっていない。

学校の生活はつまらないと感じているものはN群7.1%、P群33.3%である。その理由については、勉強がむしろくなく、先生がしゃくにさわる、友だちとうまくいかない、バカにされる、などであるが、これらの理由から学校生活

に対しほとんど魅力を感じないばかりでなく、けんお感さえいだいている。

- ・ クラブ活動や生徒会はつまらない。

表 52

認知の 状態 群	不適応 (そう思う)	適応 (そう思わない)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	15 (9.7)	109 (70.3)	31 (20.0)	155 (100.0)
P 群	6 (40.0)	2 (13.3)	7 (46.7)	15 (100.0)
計	21 (12.4)	111 (65.3)	38 (22.4)	170 (100.1)

$$\chi^2_0 = 21.38 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

れている、自分には才能がないなどとなっているが、非行生徒の多くは規律ある集団的行動をさげよるとする傾向がみられる。

d 世間に対する認知傾向

- ・ 世の中は、つめたい、信じられないところだ。

表 53

認知の 状態 群	不適応 (そう思う)	適応 (そう思わない)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	20 (12.9)	94 (60.6)	41 (26.5)	155 (100.0)
P 群	6 (40.0)	4 (26.7)	5 (33.3)	15 (100.0)
計	26 (15.3)	98 (57.6)	46 (27.1)	170 (100.1)

$$\chi^2_0 = 21.38 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

友人、おとななどから見聞きした社会的諸事象から、世間に対する否定的認知傾向が形成されたものと考えられる。

女子の場合、社会に対する認知傾向は家庭に対する認知傾向と同じく、男子とは質的に異なっている面が多い。また、N群、P群間で有意差のある項目数も多く、その具体的様相も男子とは異なるものが多い。女子の不良な認知は友人関係が最も多く、この中には対異性の問題も含まれている。学校生活に関するものがこれにつき、教師に対するもの、世間に対するものが各1項目ずつある。

この調査から女子の場合、社会に対する不良な認知傾向を形成する要因は、主として友人関係の不調と学校生活における不適応によるということができよう。

学校生活の一つであるクラブ活動や生徒会活動に対しN群の90%、P群の40.0%のものがつまらないと感じている。P群では適応応答をしているものは、わずか13.3%にすぎない。その理由として、クラブ活動や生徒会は自分たちのものではない。一部のものに独占さ

世の中は、つめたい、信じられないところだと感じているものは、N群の12.9%に対しP群40.0%と高い比率になっている。その理由については、近隣の人は自分たちにつめたい、世の中のおとなは信じられない、社会には不正が多い、など自分の直接体験やマスコミ、

4) 社会に対する反応傾向の具体的様相とその形成過程

前節で非行生徒の社会に対する認知傾向の特徴とその具体的様相、および、その形成過程について考察したのであるが、そのような認知に基づいて、彼らはどのような構えでそれに対応しようとしているかを考察すると次のようになる。

① 男子の反応傾向の実態

a 友人に対する態度

- ・ 友だちにさそわれると、悪いと思うことでもやっけてしまいますか。 (男女共通)

表 54

反応の 群/状態	不適応 (はい)	適応 (いいえ)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	15 (9.1)	124 (75.2)	26 (15.8)	165 (100.1)
P 群	11 (22.9)	24 (50.0)	13 (27.1)	48 (100.0)
計	26 (12.2)	148 (69.5)	39 (18.3)	213 (100.0)

$$\chi^2_0 = 11.75 \quad p = 0.01 \quad df = 2$$

がいやだ、あとの仕返しが恐ろしい、という消極的な意志薄弱型と、自分もやってみたくなる、人もやるのだから自分だけ悪いのではない、何となくおもしろそうだ、という積極的な型とがみられる。

誘い合う相手は不良化傾向のあるものが大部分であり、相互に誘い合うことによって非行行動に対する罪悪感が失われ、非行化が進んでいくものであろう。友人関係は子どもの非行性の形成に大きく影響していることがわかる。

- ・ 友だちとよくけんかをしますか。 (男女共通)

表 55

反応の 群/状態	不適応 (はい)	適応 (いいえ)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	5 (3.0)	139 (84.2)	21 (12.7)	165 (99.9)
P 群	7 (14.6)	35 (72.9)	6 (12.5)	48 (100.0)
計	12 (5.6)	174 (81.6)	27 (12.7)	213 (99.9)

$$\chi^2_0 = 9.34 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

憤的な理由が多いのに対しP群では、生意気だ、バカにされた、しゃくにさわる、気にくわない等の私的感情によるものが多く、両群のけんかの理由には質的な差がみられる。P群のけんかの相手は非行グループ内の争いや正常グループに対する攻撃など閉鎖的生活形態を示しており、彼ら独特の社会観をもっていることがうかがえる。

b 世間に対する態度

- ・ どこか他の土地に引っ越してしまいたいと思いますか。 (5%水準で有意)

N群の14.6%、P群の25.0%のものが現住地から引っ越してしまいたいという不適応回答をしている。

P群では不適応回答22.9%、疑問回答27.1%、計50.0%のものが友人に誘われると悪いと思うことでもやっけてしまう危険性があるが、N群では24.9%である。

誘われるとなぜ悪いと知りながらやっけてしまうのかについては、ことわりきれない、卑怯者と思われるの

けんかは子どもの日常生活においてよく生ずる社会的現象であるが、この調査では、よくけんかをすると答えているものは、N群の3.0%に対しP群は14.6%と明らかに高くなっている。

個別調査ではN群では、相手の横暴、正義をつらぬく等の正義感や公

個別調査では現住地の生活条件の不良なこと（たとえば、交通不便、場末、公害）からこのような応答したものもあるが、その地域における人間関係等（たとえば、近隣の人がしゃくにさわる、おもしろくない）からのがれようとする積極的な意味における不適応は少なからずみられ、P群は地域社会における情緒的安定性を失った生活の構えをとっているものが多い。

社会に対する不良な認知に基づくP群の反応傾向の特徴は、主として友人関係の面にあらわれている。すなわち、このような友人関係が継続していく場合、その人格の中に非行に対する抵抗感が失われ、非行性は形成されていくであろう。

② 女子の反応傾向の実態

a. 友人に対する態度

- ・ 友だちにさそわれると悪いと思うことでもやってしまいますか。（男女共通）

表 56

反応の 群	不適応 (はい)	適応 (いいえ)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	5 (32)	137 (884)	13 (84)	155 (100.0)
P 群	1 (6.7)	7 (46.7)	7 (46.7)	15 (100.1)
計	6 (3.5)	144 (84.7)	20 (11.8)	170 (100.0)

$$\chi^2_0 = 2039 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

この項目は男子も有意差のみられた項目であるが、女子では不適応応答をしたものはN、P群ともに男子より低くなっている。しかし、P群の疑問応答は46.7%と著しく高くなっている。

個別調査では男子ほど明らかな傾向はみられないが、ことわりきれない、仲間を失いたくない、という考えから誘いに応ずること、および、自分からも誘うこともあることがわかる。

- ・ 友だちとよくけんかをしますか。（男女共通）

表 57

反応の 群	不適応 (はい)	適応 (いいえ)	疑問 (どちらともいえない)	計
N 群	21 (135)	111 (716)	23 (148)	155 (999)
P 群	5 (33.3)	5 (33.3)	5 (33.3)	15 (99.9)
計	26 (15.3)	116 (68.2)	28 (16.5)	170 (100.0)

$$\chi^2_0 = 9.32 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

友だちとよくけんかをするものはN群135%、P群33.3%で両群とも男子よりも高くなっている。

けんかの理由については、意地わるをされた、告げ口をされたなどによるものが多く、けんかの方法も、口げんか、口をきかないなど女性的な方法が多くみられ、男子とは異な

った様相を示している。N群とP群との間では男子ほど質的な差異はみられない。

- ・ 友だちの成功をよるこんであげられますか。

友人の成功を心から喜んでやるということは、現実にはむずかしいことであろう。この調査では、N群では疑問応答もふくめて16.8%、P群では53.3%のものが友人の成功を心から喜んでやれないといっている。

個別調査ではこの場合、成功とは、よい成績をとる、社会的に賞賛される、自分の希望を達成すること

表 58

反応の 状態 群	不適応 (いいえ)	適 応 (はい)	疑 問 (どちらともいえない)	計
N 群	6 (3.9)	129 (83.2)	20 (12.9)	155 (100.0)
P 群	2 (13.3)	7 (46.7)	6 (40.0)	15 (100.0)
計	8 (4.7)	136 (80.0)	26 (15.3)	170 (100.0)

$$\chi^2_0 = 11.44 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

くやしい、しゃくだ、うまくやった、などのしつと的な型と、成功したいとは思わない、成功することなどないから、そんなことは考えない、というすねたあきらめ的な型とがみられる。

b 学校生活に対する態度

- ・ クラスでできたことには、自分が反対でも従いますか。

表 59

反応の 状態 群	不適応 (いいえ)	適 応 (はい)	疑 問 (どちらともいえない)	計
N 群	15 (9.7)	113 (72.9)	27 (17.4)	155 (100.0)
P 群	1 (6.7)	5 (33.3)	9 (60.0)	15 (100.0)
計	16 (9.4)	118 (69.4)	36 (21.2)	170 (100.0)

$$\chi^2_0 = 14.92 \quad p < 0.01 \quad df = 2$$

えない理由としては、自分たちの意見がとりあげられない、成績の良いものだけできめる、などをあげているが、このような反集团的行動のため、いっそ級友から白眼視されて人間関係が悪化し、ますます一般集団から孤立し非行生徒だけの集団ができやすく、非行性形成の要因となっている。

- ・ 集団活動に参加することは、いやでたまりませんか。(5%水準で有意)

集団活動に参加することがいやだというものは、N群32%に対しP群では200%と多くなっている。前項の「クラスの決定に対する態度」の調査でもP群は集団参加をきらうものが多くみられたのであるが、この項目の調査によって、それがさらに裏付けられた。

非行生徒が集団参加をきらう理由については、自分の思うとおりにできない、いやなことをさせられる、集団活動には興味がないなど、主として本人の自己中心主義、わがままに基づくものが多くみられる。このようにして、自ら集団から離反しようとするところに、他の一般生徒との違和感、疎外感が形成される原因があり、自分たちだけの閉鎖的集団にかたまるようとする傾向が生ずるのである。

女子非行生徒の社会に対する反応傾向の特徴は、友人関係のほか学校生活における集団行動の面にあらわれている。この2つの面に非行のない正常な生徒の対社会的態度との違いを見い出すことができる。男子にはみられなかった学校生活に対する不良な反応傾向は意外であった。対人関係の不調は集団への参加を困難にし、それが非行性の形成に大きく影響しているものといえよう。

などをさしているが、N群では適応応答をした大部分のものが友人の成功に対して、うらやましいが喜んであげられる、自分も努力すると答えているのに対し、P群では適応応答をしたものでも、ねたましい気持ちや自分には望めないという劣等感がみられる。不適応応答したものは、

不適応応答はN群9.7%、P群6.7%でN群のほうが高くなっている。疑問応答の大部分は不適応応答に近い考えをもっている。これを加えるとP群はN群の3倍近い比率となる。

この内容については具体的には、校則、クラスの申し合せなどに対するものであるが、クラスの決定に従

3 総合的考察

この調査において教研式適応性診断検査を用いて客観的に非行生徒の家庭と社会に対する認知傾向と反応傾向を調査し、さらにこれを質問紙、作文、個人面接等によって、その具体的様相を確かめたのであるが、家庭に対する調査では性別によってその様相に違いはあっても、親の生活態度や子どもに対する態度、家庭のふんい気などに不良な認知傾向を有するものが多いこと、および、そのような不良な認知に基づく反応傾向として男女ともに親に反抗し、親を拒否し、親から逃避しようとする構えをとってゐることがわかった。

また、社会に対する調査では、これも男子と女子との差はあるが、教師の生徒に対する態度、学校生活のあり方、友人との関係などに不良な認知傾向を有するものが多いこと、および、そのような不良な認知に基づく反応傾向として男女ともに、友人に対する反感やねたみ、誘惑に弱い、学校生活における集団活動から逃避しようとする構えをとり、自己疎外に陥っていることが明らかになった。

このような家庭や社会に対する不良な認知傾向やそれに基づく不良な反応傾向が長期間にわたって継続する場合、子どもは情緒的に安定を失って情動障害をひき起し、それが固定化することによって非行に陥りやすい人格の傾向 — 非行性 — は形成されるものであるが、その具体的様相と形成過程の一端をこの調査によって確かめ得たものと思う。

結局、非行防止のための効果的な方法は、非行性の形成を阻止し、健全な人格を育成することにあることはいうまでもないが、子どもの人格における非行性の形成を阻止するためには、家庭や社会に対する良い認知傾向とそれに基づく良い反応傾向を育成することにほかならない。生徒指導の面において、そのための具体的方策が考慮されるべきであろう。

お わ り に

この研究は非行をする子どもは、その人格に非行に陥りやすい傾向 — 非行性 — があるであろうという仮説を、諸家の研究を基礎とし諸調査によって検討しようとしたのであるが、前2か年の研究調査によって一応その存在の確認と、それによる非行予測はある程度可能であることを実証的に確かめ得たのである。

非行防止対策の積極的推進のためには、単に非行危険性を予測するだけではじゅうぶんではない。非行性とは具体的にどのようなものか、また、それはどのようにして形成されるのかについて解明し、それに対する具体的な諸施策が構じられなければならない。非行性の形成要因やその過程は複雑であり、その解明は容易でないことはいうまでもないが、彼らは家庭および社会に対しどのように感じ、それに対してどのような構えをとっているかということ、すなわち、認知傾向と反応傾向を一つの視点として、非行性の実相とその形成過程の解明を3か年研究のまとめとしてとりあげたのである。

この調査結果については、理論的究明の不じゅうぶんなこと、調査方法やその処理が必ずしも適切とはいえなかったことなどから、期待した結果は得られなかったきらいがある。しかしながら、非行生徒の家庭や社会に対する認知傾向や反応傾向の特徴、換言するならば、彼らの家庭観、学校観、社会観とそれに

基づく行動の構え方について、ある程度把握することができたものと思う。このような、非行的に条件づけられた感じ方、見方、考え方やそれに基づく行動態勢とは、どのようなものであり、どのような過程を経て形成されるものであるかは、これだけの調査で断言はできないが、これまで知り得た調査結果を非行生徒の指導対策を考える上の一つの資料として提供することができれば幸せと考えている。

おわりに、この研究についての各位のご批判をお願いするとともに、この研究調査に対し終始積極的にご協力をいただいた研究協力校の校長先生はじめ諸先生に対し、深く感謝の意を表するものである。この研究を担当し執筆したのは 東山修二 である。

引 用 文 献

注 1	青少年白書 1966	総理府青少年局	p 248
注 2	生徒指導の手びき	文 部 省	p 177
注 3	同 上		p 179
注 4	非行臨床心理学	水島 恵一	p 15
注 5	同 上		p 19
注 6	同 上		p 22 ~ p 28
注 7	少年非行の予測	館 沢 徳 弘	p 7
注 8	教研式適応性診断検査手引	磯貝信太郎 他	p 7
注 9	同 上		p 18
注 10	同 上		付表 2
注 11	同 上		p 42
注 12	同 上		p 42

参 考 文 献

牛島義友 他	講座 家庭と学校 第 5 巻 問題児と非行少年	金子 書房
水島恵一	非行臨床心理学	新 書 館
上武正二 他	非行生徒の心理と指導	新 光 閣
村田宏雄	青少年犯罪の社会心理	刀 江 書 店
グリェック, S. & E.	少年非行の解明	法 務 省
館沢徳弘	少年非行の予測	一 粒 社
井坂行男	非行の予測と指導	文 教 書 院
井坂行男 他	問題行動の早期発見	文 教 書 院
五大市教育研究所連盟	教師と非行中学生	東洋館出版社
安倍淳吉	社会心理学	共 立 出 版
ランバート, W. & E.	社会心理学	岩 波 書 店
総理府青少年局	青少年白書 1966	大蔵省印刷局
日本教育社会学会	教育社会学研究	東洋館出版社

応用教育研究所
水島恵一
山本晴雄
文 部 省
磯貝信太郎 他

研究紀要 第3集
非行児の価値観
非行の教育社会学
生徒指導の手びき
教研式適応性診断検査手引

応用教育研究所
児童心理 Vol.19 No.2
児童心理 Vol.20 No.9, 10
日本図書文化協会